



めじかじ通信

航海-78

めじかじ市民記者ネットワーク

市民記者の目から見た「こもろ」を発信していくページです。ちょっとへんてこりんな名前「めじかじ」。意味は「め=目」と「じ=耳」を使って、発見への「かじ=舵」をとろう。どうぞ期待！
またガッツのある取材記者を募集します。

▼問い合わせ先 企画課 情報戦略推進係



紫色のショートヘアが小林由美子さんのトレードマーク

養護学校の教諭をしていた時に、保護者から面談を拒否された。障がい児の親の辛さは分からない。話し合いは無駄と言われたが、小林由美子さんはひるまず話し続けた。障がい児は持たないが、辛い思い出はあつた。小学校教諭だった父親の転勤に従って義務教育の9年間に4回も転居し、環境の違いになじむのに苦労した。過疎地の小学校へ転校した時には同級生全員に無視され、口もきいてもらえない経験をした。他に通える学校は無く、同じ学校に通勤する父親の自転車に乗せられて通学せざるを得なかった。一人っ子なので、結託して反抗することもできなかつた。今思えば転校生が珍しくて遠巻きにしていただけなのだろうが、当時

障害のある子のために、教育と支援を40年

小林 由美子さん (64歳) 〓御幸町〓

は孤独で悲しかった。試練は続く。

教頭になってからは、わが子を実家の両親のもとに置いて単身赴任を続けた。学校生活を心配して、夜中に何度も子供に会うため駆け付けた。そして出した結論は「自分の子に義務教育を中断させること」だった。教育者として辛い選択だった。

それでも校長時代の7年間に、生徒の誰一人にも死なれずに済んだ。養護学校高等部で担任をした9人中5人が親と一緒に集まった同級会では、5人とも22年間職場を変えずにいることを知ってうれしかった。5人は40歳になっていた。5人に「働く力」があることに加えて、家庭と会社の関わり合いがあつてこそ実現したことだ。

定年退職後も県教育委員会の特別支援教育推進員として、小林さんは忙しい日々を過ごしている。特別支援教育一筋のきっかけは「中学生の時、同じ学年の支援学級に通う女の子が毎日笑顔で挨拶してくれたこと」。「あの子たちだけが持つ力を借りて、皆が幸せに生きているのかな？」というのが40年間続けて得た実感だという。



写真提供：ぶれジョブinさく

動物園での「ぶれジョブ」

小林さんが持つ、もう一枚の名刺には「ぶれジョブinさく連絡協議会会長」とあり、「全国ぶれジョブ連絡協議会」の世話人も務めている。「ぶれジョブ」とは平成15年に倉敷市の中学校教諭が始めたボランティア活動で、障がいのある子が菓子屋・スーパ―・図書館など様々な場所で「おしごと」をすることで地域とのつながりを付けることが目標だ。「ぶれジョブ」の子供たちを見かけたらぜひ「こんにちは、おしごとご苦労さま」と声をかけてほしい、と小林さんは話している。そしてさらに多くの市民を巻き込むため「ぶれジョブのサポーター（おしごと）に立ち会う人）になりませんか？ 楽しいですよ」と会う人ごとに誘いをかけている。

(取材・文 佐藤 万千子)

ゆらさんの四季の薬膳 五色の食卓



えっ、な〜に、五色の食卓って？と思いますよね。五色とは食物の持つ五つの色です。中医学では自然界や万物を五つの要素にわけ、春は味でいうと酸味、色は青。夏は苦味で赤、梅雨の時期は甘味で黄。そして秋は辛味で白、冬は鹹味（海のミネラルを含んだしょっぱさ）で色は黒となります。話はそれますが、五味子って知っていますか。マツブサ科のチョウセンゴミシの実のことで、五つの味すべてを備えた珍しい植物。咳や寝汗、不眠、下痢に効く生薬です。さて、夏は食欲が減退し、つついっ手を抜きがちです。そんなとき、食物の色を思い出してください。青は緑の野菜類、赤はトマトや肉類、黄は穀類、白は大根や長芋など。黒は昆布や黒豆、黒ゴマのように黒い食材です。たとえ手抜きでも五つの色が必ず入るメニューを考えれば、栄養のバランスはとれます。薬膳は、偏らず味と色を調和させる営養学です。この夏は、食卓の五色に注目してみましよう。

(国際中医薬膳師 小清水由良)

